

『まちづくり』『仕事おこし』を考える 仙台集会 市民発 仕事おこしシンポジウム in みやぎ

2002年4月13日(土)午後1時~5時

仙台国際センター

開会挨拶

菅野 正純 (日本労協連理事長)

「まちづくり」「仕事おこし」を考える仙台集会」にお集まりいただきありがとうございます。この集会は全国縦断シンポジウムの一環として開かれて東北で最初に開かれる集会です。集会にかけた私たちの思いは、なによりも大倒産・大失業という現在の事態をどのように克服していくのか、ということにあります。完全失業者が350万人を超えて、潜在的な失業者、失業ないし失業寸前に追い込まれている人は4000万人を超えているといわれています。倒産は年間2万件に達していて、そういうことを背景に3年連続、3万人を超える人が自ら命を絶っています。

こうした状況を放置することはもはや絶対に許されないところまで来ているかと思えます。しかもこれまでのような企業の誘致やゼネコン型公共事業でなんとかしていくというような考え方がもはや望むべくもない時代の中で、地域に生きる私たち自身が「まちづくり・仕事おこし」を主体となって活動していく以外に、道は開かれないというふうに考えています。この集会はそういう決意を固めて、お互いの実践と知恵の交流をしあいながら、市民発・地域発の就労・産業創出の道を切り開いていこうという趣旨で開かれていま

す。

構造改革といいますが、これまでの政府の対応というものを見ていますと、非効率な企業や産業はつぶれればつぶれるほどよい、そのあとにおのずから効率的な産業や企業が生まれてくるだろうというようなことを言っていたと思います。つまりは企業がもっと儲けられるようにするというこのためには人を切り捨て、農業や林業が崩壊しても構わない、あるいは小さな商店街がつぶれても構わない、といっているに等しいと思います。

しかしよく考えてみると、というか、まったく当たり前のことなのですが人を切り捨てておいて景気がよくなるということは本当はありえないということは明らかだと思えます。痛みを耐えればそのうち景気がよくなるということがまったくでたらめだということが、現在の状況が示しているところだと思えます。

そこで私たちは考え方を大きく転換する必要があると考えます。たとえ金儲けにつながらなくても人の命や暮らしや地域というものを豊かにしていくことはいっぱいあるはずで、そういう仕事を人々がお互いに心をこめてサービスや物を創りだしながら交換しあうという新しい経済のありかた、というものを

作り出すという時代にきているというふうに思っています。切り捨てではなくてすべての人がかけがえのない仕事と役割を得ていくということが新しい地域を作っていくことのそして日本の社会を活性化していくというものの根本にあると思われまます。

政府も労働界も財界も含めてこれから人間が求められる領域はなんだろうというふうに考えればおそらく多くの人々が福祉や環境、そしてこの東北の地において大事な地位を占めている農業や林業といった第一次産業というものをどうやって再生していくのかということになりますし、まちづくりや環境というもの一つ一つをよくみれば金儲けには適さない領域でありながら人間の労働がますます求められている領域であると考えられます。

最近心強く感じているのは地域や地方から先ほどの構造改革とは別な流れが生まれということです。労働者協同組合が提唱している仕事おこしのいろいろな提案が都道府県や市町村のところで大変期待が高まってきており、鹿児島から始まって東京に広まっていますが、失業者のための公的な職業訓練事業の中に協同労働で仕事をおこすという「仕事おこし講座」が取り入れられています。そしてその修了生たちによって直ちに仕事おこしの計画がつけられています。

その修了生の人たちの言葉を合わせて考えてみると、ひとつにはヘルパー講座とかIT講座というように、直接の講座の内容というより、そのなかで私たちが提案している地域福祉事業所ということに大変注目しており、雇われなくても自分たちで仕事をおこしているんだ、また現実に立派にやっている先輩がいるんだということを見て確信をもっていることが第一です。

また、一人一人がこの職業訓練が終わった

ら企業に雇われるのを待っているのではなくて、仲間といっしょに仕事をおこせるという安心感を持っており、狭いケアサービスだけでなく食事の問題から移動の問題、住宅の改修の問題などさまざまな生活を支える仕事総合的におこせるということで、こういう地域を明るくしていけるという誇りが持てる仕事についていきたいという人がどんどん増えているように思います。

この修了生の人たちの行動は働く人自身が労働を再生し、人と人のつながりを再生していこうという、文化の質や日本社会の質が変わっていくような変化を示していると思います。結局のところ、仕事をおこす原動力は金を儲けるかどうかではなくて、仲間と共に人や地域に役立つ仕事がおこせるのか、仕事に就きたいという意欲をどれだけかきたてることのできるのかというふうに移りつつあるように思います。

それを私たちは「協同労働」というように考えるようになりました。働く人と作り出されたサービスや商品を利用する人とが共感・協同で結ばれて地域の中に人と人のつながり・協同を生み出していく、そういう働き方を協同労働と私たちは呼びました。こういう状況の中で、国会では自由民主党の人たちを含めて協同労働の協同組合を法制化しなくては現在の大失業・大倒産、地域崩壊という事態が打開できないということをお認めていただいて、この法制化がきわめて現実的なものになろうとしています。

そういう意味で今日の集会を通じて、東北の中に起きている新しい動きと交流しながら東北発の地域づくり・仕事おこしという構想を練り上げながらこの流れを加速していただければ、ということをお願いしまして、開会の挨拶としたいと思います。どうもありがとうございました。